

年頭のご挨拶

公益社団法人日本金属学会 会長 福 富 洋 志

皆様、新年明けましておめでとうございます。

公益社団法人に移行致しまして丸3年となる年を迎えました。会員の皆様のご協力をいただきまして、公益法人に求められる様々な要件を満たしつつ学術の発展を担う法人としての運営が、なお課題はあるものの徐々に軌道に乗って参りました。

昨年11月末に、本会会長が理事を務める(公社)日本工学会が国立京都国際会館で第5回世界工学会議(World Engineering Conference and Convention 2015: WECC2015)を開催しました。Engineering: Innovation and Societyを掲げたこの会議で、地球温暖化の問題が主題の一つにあらためて取り上げられました。会議初日は偶然にもフランスで開催されたCOP21の初日でもあり、時を同じくしてエネルギー消費の低減が世界の未解決重要課題としてクローズアップされました。このエネルギー課題をはじめ、現代社会の抱える様々な課題の解決に対して「金属及びその関連材料の学術及び科学技術の振興に関する事業を行い、不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与することを目的とする」本会の活動の重要性がますます増していると感じております。

年頭にあたり、会長就任のご挨拶の中で紹介させていただいた本会の活動方針につきまして、これまでのご報告と今後の方針につきまして述べさせていただきます。

日本金属学会誌の情報発信力を強化するために、電子ジャーナルの個人研究目的に限定したフリーアクセス化、Graphical Abstractの掲載、投稿・掲載料の無料化を実施して参りました。その結果、昨年3月から12月で各号の平均ページ数が61ページとなり、前事業年度の36ページから大幅に増加しました。また、欧文誌Materials Transactionsでは企画特集の充実、Technical Article分類の新設などの方策を実施してきました。これらにより投稿数は増大し、昨年3月から12月で各号の平均ページ数は182ページとなり、前事業年度の149ページから、和文誌と同様に大きく増加しました。このように、和文誌、欧文誌共に新しい試みが一定の成果をあげつつあります。しかし、インパクトファクターは、残念ながら和文誌、欧文誌共に高くはない状態が昨年も続きました。欧文誌ではインパクトファクター向上のために電子ジャーナルの個人研究目的に限定したフリーアクセス化範囲の刊行後半年前までの拡大、OverviewおよびReviewの増強、引用文献通知および注目論文等の一斉メール配信など様々な方策を実施して参りました。方策の効果は少し時をおいて現れると考えられますので、投稿数の増加策と様々な方策が質の向上をもたらしているかについては、今後を期待することとしてこれらを継続し、その効果を見極めながらさらに方策を講じていくことと致しました。

会員の皆様におかれましては、優れた研究成果を積極的にご投稿いただくと共に、その研究が発展して生まれた成果も和文誌、欧文誌に是非続けてご投稿いただきたいと存じます。また、会員のための情報誌である会報につきましては、電子ジャーナルの配信を継続すると共に、会員の皆様が手離せない、魅力ある情報誌として内容の充実に努めて参ります。



昨年の春期講演大会は東京大学駒場 I キャンパスで開催致しました。講演件数は721件、参加者は1,322名でありました。また、九州大学伊都キャンパスで開催した秋期講演大会の講演件数は915件、参加者は1,375名でした。前事業年度の春期講演大会と秋期講演大会の講演件数、参加者数はそれぞれ825件、1,425名、960件、1,496名であり、残念ながらこのところの減少傾向に歯止めをかけることはできませんでした。魅力ある講演大会にするための諸方策の検討を現在進めているところですが、会員の皆様におかれましては、本年の講演大会で多くの講演がなされ、金属及び材料工学分野の研究が活性化するようご協力をお願いする次第です。

昨年の春期講演大会では、学生の進路選択の参考に資することを目的とした企業説明会を初めて実施致しました。企業35社、学生118名が参加する盛況な催しとなりました。産学いずれにとりましても意義のある企画であり、今春は合同開催される日本鉄鋼協会の春季講演大会に参加する学生も参加できるようにして引き続き開催します。

調査・研究事業においては、人材育成委員会が作成した高校生向けホームページをオープンします。企業の若手人材育成をめざした出前講義も継続します。国内連携では日本鉄鋼協会との緊密な連携を基本に、材料戦略委員会および男女共同参画委員会活動を推進し、Materials Transactions 共同刊行編集委員会等を通じた材料系学協会との連携活動も引き続き強化推進して参ります。

日本技術者教育認定機構(JABEE)との連携も進めます。本年、材料戦略委員会の世話学会が日本鉄鋼協会から本会に交代します。本年は第5期科学技術基本計画がスタートし、文部科学省科学研究費補助金の平成30年大改正の内容が決定する年でもあります。このような大きな変革の中で、本会は材料系学協会のリーダー学会として材料分野の研究者・技術者が存分に活躍できる場を提供できるよう努めて参ります。皆様のご協力をお願い申し上げます。

国際連携では、昨年も大韓金属・材料学会(KIM)とのKIM-JIMシンポジウムの開催、米国The Minerals, Metals & Materials Society(TMS)とのJIM/TMS Young Leader International Scholar Programによる交流を行いました。また、材料分野の国際連携組織であるInternational Organization of Materials, Metals and Minerals Societies (IOMMMS)との連携事業であるWorld Materials Day Awardも実施致しました。KIM-JIMシンポジウムは、チタンをテーマとして韓国から8名の研究者を迎えて秋期講演大会時に開催されました。関係者のご努力のおかげで大変盛況でありました。大韓金属・材料学会と本会とは毎年互いに会長を講演大会に招待し、挨拶をする交流を続けており、昨年も実施致しました。本年はKIM創立70周年にあたり祝賀訪問いたします。これらの国際連携活動を本年も継続実施致します。さらに、本年8月にはPRICM9国際会議(9th Pacific Rim International Conference on Advanced Materials and Processig)を主催学会として国立京都国際会館にて開催致します。これにつきましても会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

本会は、諸先輩のご活躍を礎に今も着実に歩みを進めております。しかし、会員数や講演大会での講演件数、参加者数の増加をはじめ学会活性化のための努力を常に重ねておく必要があります。なかでも会員数の増加は学会活動活発化の基盤であり、学会の基幹的活動である学術誌の充実、魅力ある講演大会づくりをはじめ、産学や分野を超えた若手研究者・技術者の組織化、企業の若手人材育成のための講義や講習会、活発な支部活動、などの多様な活動によって本会の価値を示して図っていく必要があります。理事会での決議のもとに、これらの具体案の検討を担当委員会で昨年後半より進めております。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝とご発展を祈念しまして年頭のご挨拶とさせていただきます。

2016年1月1日